

地中海古代都市の研究 (136)

古代都市メッセネにおける劇場の客席の復元に関する研究

9. 建築歴史・意匠 - 4. 西洋建築史
ギリシア, メッセネ, 劇場, 古代建築

準会員 ○大塚和樹¹ 正会員 伊藤重剛²
同 吉武隆一³ 同 岩田千穂⁴

1 はじめに

熊本大学ギリシア古代建築調査団 (団長:伊藤重剛) は、2007 年よりギリシアの古代都市メッセネにおいて、劇場の実測調査をおこなってきた。前稿ではローマ時代の舞台建物の復元研究を行なったが、¹⁾ 2011 年度に客席部分の復元研究を試みたのでその結果をここに報告する。劇場に関する一般的な既往研究はあるが、²⁾ この劇場についてまだ発掘されたばかりで、客席の復元について検討したのは本稿が初出である。

2 遺構の概要

劇場はアゴラの北西隅から約 34 m 西に自然の斜面を利用して作られている。現在はオルケストラ、舞台建物、パラドスの壁、西後壁、東後壁などが残っている。しかし客席部分は、オルケストラに接する最下部を除いて、ほとんどが破壊され、現在は土砂がむき出しの状態となっている。当初の建設年代は紀元前 2 世紀頃とされているが、その後幾度か変遷を経ている。³⁾

2-1 オルケストラ周辺・客席

オルケストラの縁石内側での直径は 21.6m、エウリポス (溝) の外縁まで含めると 23.7m である。オルケストラ周辺部にわずかに残った客席と階段から、客席下部は 10 本の階段により 11 の部分に分割されていた。座席最前列にはモールディング付きのポロス石材による座席の一部が、唯一当初の位置のまま残っている。また西側客席の中腹にはディアゾーマ (周回通路) の基礎と思われるポロス石材が出土している。

2-2 後壁

客席は座席数を確保するために、外形が通常の半円の外形を後ろに膨らませる形で作られている。客席上部は地上レベルよりも高い位置まで作られ、それを支えるために後壁が作られている。現在まで西後壁と東側壁が発掘されているが、それらをつなぐ部分は未発掘である。西後壁は長さ 60 m に亘り、高さ 2 ~ 5 m まで残っている。東後壁も劇場座席部分の南東隅から

西に延びる座席端部の壁と、北に延びる壁がよく残り、劇場の東側の輪郭を形成している。東後壁の南端部には、劇場の北側に抜ける街路から、劇場の座席に入るための斜路が設けられている。

2-3 後壁階段

後壁には観客のアクセスための階段が付いている。西後壁には細い急な階段が 3 か所にあり、北から順に西側北階段、西側中階段、西側南階段とする。西後壁の北西の隅には、幅約 2.5m、長さ約 10m の大階段が残っている。東後壁にも破壊された 1 カ所を含め 3 カ所の階段に階段が確認される。西後壁の階段と同様、北から順に東側北階段、東側中階段、東側南階段とする。

2-4 パラドス

一般にギリシア式劇場では客席の平面形状は、半円より大きい角度をなし、ローマ式劇場では半円をなし、両側のパラドスの壁を結ぶ線は直線となる。メッセネでは西側ではオルケストラから西へ約 20 m の地点で、下部のみが外側へ曲がっているが、上部は舞台建物とほぼ平行である。一方東側のパラドスの壁は舞台建物の壁とは平行ではなく、ギリシア式からローマ式への移行期間の劇場平面を示している。

2-5 出土部材

座席部材は石灰岩で、断片を含め 550 個が散乱した状態で出土した。ふくらはぎが当たる部分を少し彫り窪めてある。部材の背面上端部、底面前方には約 0.1 ~ 0.15m 幅で平滑に仕上げられている。長さ 0.7 ~ 1.9m で、座るための上面が幅 0.34 ~ 0.37m、高さは 0.29 ~ 0.42m である。(図 5)

パラドスの壁の上端部にあった笠木部材が 7 個出土している。長さは 0.78 ~ 1.3m、高さは 0.19 ~ 0.23m である。材質は石灰岩で、上面両側を面取りした断面で、両端の接合面は底面に対して 22 度斜めに切られている。つまりこれは客席の勾配に合わせて、パラドス壁の上面で斜めに設置されたことを示している。ま

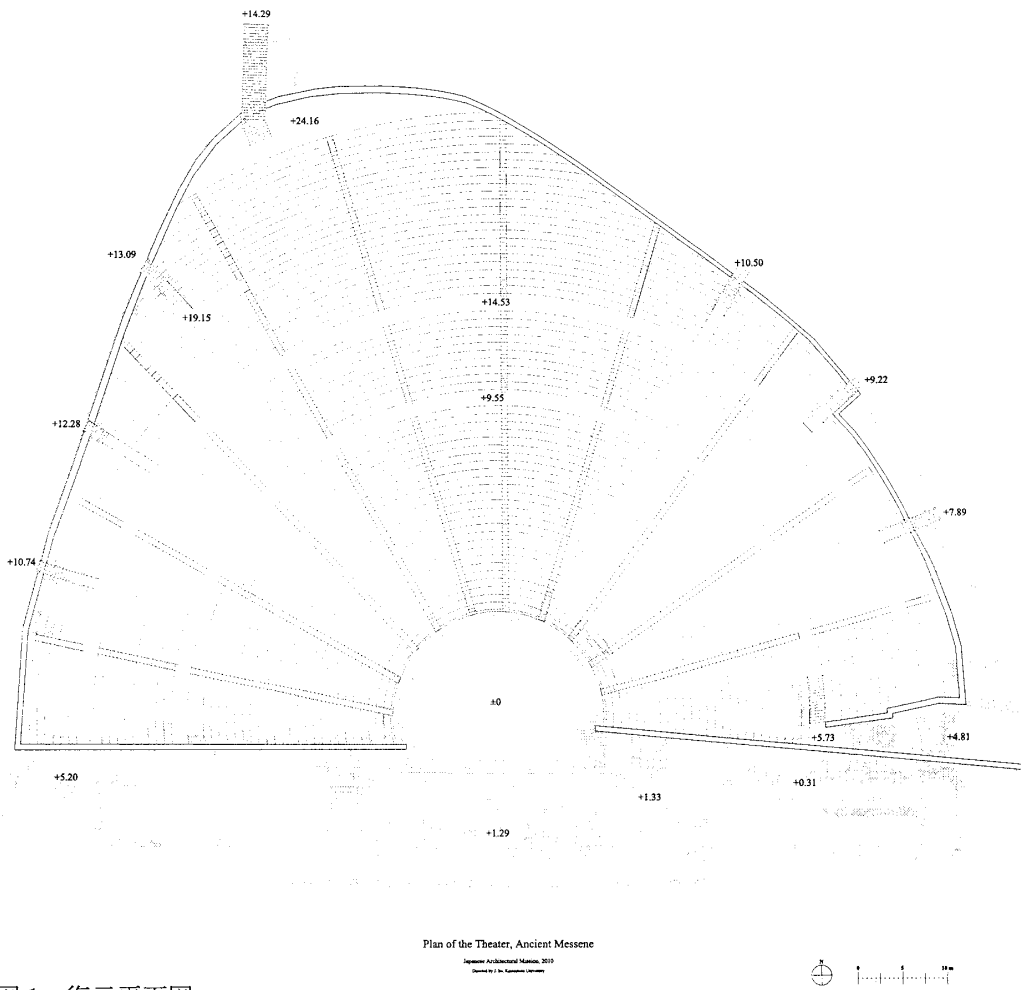


図1 復元平面図

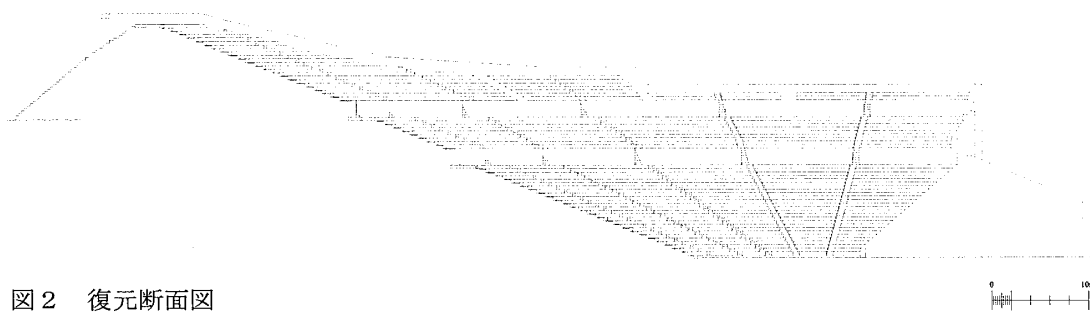


図2 復元断面図



図3 劇場航空写真 (メッセネ考古学協会撮影)

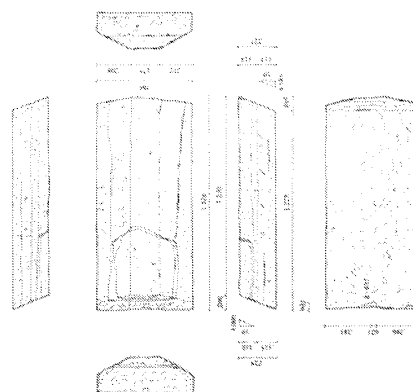


図4 笠木部材 (No. 45)

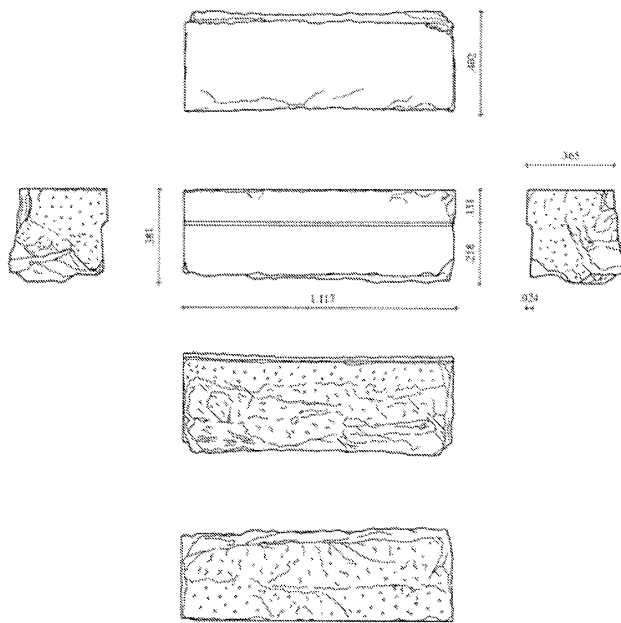
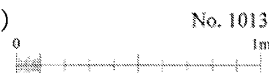


図5 座席部材 (No. 1013)



た西パラドスには、笠木の下部材で同じく勾配22度を示す三角形の部材も見られる。

3 客席の復元

3-1 復元のための仮定

復元に利用できる資料は、以上述べたように、座席部材、パラドスの壁の傾斜を示す笠石及び三角形部材、オーケストラ周辺に残る階段の一部、西側客席中段に残るディアゾーマの基礎と思われる石材、それに西側、東側及び南東側に残る後壁とその階段、そして測量で得たこれらの3次元的な位置情報のみである。客席全体を正確に復元するには、出土した資料は非常に乏しいので、いくつかの仮定が必要である。

復元の基本的な考え方は、西側客席中段にあるポロスと石灰岩の石材の列をディアゾーマの基礎と考え、この位置に第一ディアゾーマがあったと仮定する。後壁の階段は、距離やレベルの関係からこの第一ディアゾーマにはアクセスできないので、そのためにもっと高い位置に第二ディアゾーマを仮定する。7本ある後壁階段の位置とレベルはそれぞれ違うので、それぞれを検討すると、西側中階段の現存最上段のレベルを第二ディアゾーマのレベルとし、同時にまた、同じく階段の位置、傾斜及びレベルを検討すると、東側中階段が最も短い距離でしかも直接このレベルに達することになるので、東側中階段をそのまま延長して第二ディ

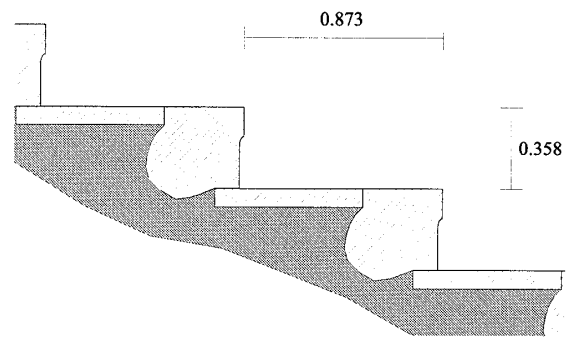


図6 座席の石材の配置

アゾーマのレベルに達した位置を、第二ディアゾーマの水平位置と仮定した。以上を劇場の客席復元の基本的な仮定として、復元を進める。

3-2 ディアゾーマの決定

以上の仮定で、第二ディアゾーマのレベルと外側の位置が決まったので、オーケストラからこの位置までの水平距離とレベル差を求めれば、客席の勾配が得られる。ただし、二つのディアゾーマの幅とディアゾーマの後壁の高さを減じて計算することが必要で、また客席第一列だけはポロスの座席が現存し、出土している石灰岩の座席の寸法と違うので、第2段めの位置から計算を行なった。ディアゾーマの幅とその後壁の高さは分からないので、同じペロポネソス半島にあり規模も似ているエピダウロスの劇場の寸法、つまり幅1.8m 後壁高さ1.4mと同じと仮定した。⁴⁾

具体的な計算は次のようになる。つまり、東側中階段を延長して（実際にはあと6段）西側中階段のレベルに達する位置は、デジタル測量した結果から、座席2段目の位置から水平距離で34.317mと計算される。これから2本のディアゾーマ幅を引いた値は30.717m ($34.317 - 1.8 \times 2 = 30.717$)で、これが客席だけの水平距離である。また座席2番目と第二ディアゾーマのレベル差は14.002mと計算されるので、これから第一ディアゾーマの後壁の高さを引くと、同様客席みのレベル差は12.602m ($14.002 - 1.4 = 12.602$)となる。結果、客席の傾斜は0.410 ($12.602 / 30.717 = 0.410$)で角度は22.3度となる。この角度は笠木接合面の角度の平均21.4度、またパラドス壁の三角形部材の傾斜22.1度ともほぼ一致するとみてよい。

第一ディアゾーマは前述したように、西側客席中段附近のポロス石と石灰岩の基礎の上ののっていたと考

える。先に述べた客席の傾斜を考えると、この基礎のレベルの直上に第一ディアゾーマの内側の縁がのることとなった。

3-3 各座席の復元

各座席は図5のように、出土座席部材の形状から背面上端部と後ろの座席の前面下端部の間に床材を置く形で構成された。(図6) 各座席の高さは部材データの平均値0.358mとして求められる。そして座席全体の傾斜は0.410なので、1段の座席幅は $0.873(0.358 \times 1/0.410 = 0.837)$ と逆算できる。

3-4 後部客席・後壁階段の復元

西後壁が半円形よりも後方に大きく膨らむ特異な形をしているため、第二ディアゾーマの後方にも、そのまま同様の角度で座席が配置されたと推定して、復元を行なった。

西側南、西側中、東側南、東側中、東側北階段はそのまま階段を延長すると、第二ディアゾーマのレベルより高い位置に達してしまうので、階段でそのレベルに達したら、水平の通路によって第二ディアゾーマへと至ったと考えた。しかし西側北階段は、現存の最上段のレベルが第二ディアゾーマより1.7m高くなってしまったため、西側北階段をそのまま延長し、客席に達したところに、一部だけ第三ディアゾーマを設けた。北西大階段はオルケストラの中心を向いていないため、大階段が後壁に達する位置からオルケストラの方向へと曲がる階段として復元した。北西大階段の最上段と客席最後部の間には、後壁が高くなり過ぎるので危険防止も考えて、座席を配置しないスペースを設けた。

3-5 南東後壁斜路の復元

東後壁の南端部には外部からの出入口となる緩傾斜の斜路がある。この斜路は幅も広く通過する人数も多かったと考えられるので、そのまま第一ディアゾーマに直接入られたと考えるのが妥当であろう。しかし、第一ディアゾーマの床面と斜路の床面には3.82mのレベル差があるため、第一ディアゾーマの南端には階段を配置した。

3-6 客席階段の復元

オルケストラか客席部分に伸びている階段の延長線は、実測によるとひとつの中心に集まらず、中央付近、西側、東側の3つの階段群が別の中心をもっている。これはおそらく年代が経過に応じて、客席の形がギリシア式からローマ式に変化したことによって生じたものと思われる。

4 結論

メッセネの劇場の客席部分は、階段により楔形の10の座席部分に分けられ、さらに2つのディアゾーマによって上下3つの部分に分けられていた。後壁に設けられた階段は6つは上の第二ディアゾーマに繋がっており、残りのひとつはさらに上の部分的に設けられた第三ディアゾーマに繋がられていた。客席下段は26段、中段は10段、上段は最大23段で、最後部までは合計59段の座席が作られていた。客席の傾斜角は22.3度であった。

オルケストラをレベル0とすると、各部の高さは第一ディアゾーマ9.55m、第二ディアゾーマ14.50m、第三ディアゾーマ19.15m、劇場最上部24.16mであった。また後壁は北西大階段の付近で高さ10mとなり、西側及び東側に向かって少しずつ低くなっていった。

メッセネの劇場は、パラドスも後壁の形も左右非対称となっており、他のギリシア・ローマの劇場と比較しても類を見ない特異な形をしている。またパラドスの壁の形状から、ギリシア型からローマ型へと移行する過渡期の平面を示している点も、非常に興味深い。

謝辞 本研究は平成23年度日本学術振興会科学研究費(基盤研究(S)課題番号20226012(代表:伊藤重剛))による研究助成を受けた。

註

- 1) 伊藤重剛ほかにより、『地中海古代都市の研究』シリーズとして報告されている。日本建築学会九州支部研究報告、50号3、pp.637-640、pp.641-644、2011年3月；49号3、pp.589-592、pp.593-596、2010年3月；第48号3、pp.773-776、pp.777-780、2009年3月
- 2) M. Bieber, *The History of the Greek and Roman Theater*, 1971; F. Sear, *Roman Theater*, Oxford, 2006などが概論書として、あげられる。
- 3) Π. Θέμελης, *Το Θέατρο της Μεσοσύνης Αρχαιολογική Τεκμηρίωση*, Αθήνα, 2008 (発掘者テメリス氏による劇場の中間報告)
- 4) W. Müller-Wiener, *Das Theater von Epidauros*, Stuttgart, 1961, Tafel 9 参照

1 熊本大学工学部建築学科 4年
2 熊本大学工学部建築学科 教授 工博
3 熊本大学大学院先端機構 特任助教 博(工)
4 熊本大学大学院自然科学研究科 博士後期課程

Student, Faculty of Engineering, Kumamoto University
Prof., Dr. Eng., Kumamoto University
Assist. Prof., Dr. Eng., Kumamoto University
Student, Graduate School of Science and Technology, Kumamoto University